



一粒の麦



ひとつぶのむぎ

300号 おめでとう！



1980年代



2000年代



1990年代



1980年代



1970年代



1980年代



1980年代

聖書のことば

わたしがあなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合うこと、これが私の戒めです。

(聖書ヨハネの福音書15章12節)

■ With (共に)の進化 ■

理事長 川越 瑞枝

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

「一粒の麦」発行300号の記念に文章を書かせていただき、喜びもひとしおです。思い起こせば、この機関紙の第1号は、昭和51年(1976)夏に、ドラム型のタイプライターで文字打ちし、カットや挿絵を手書きし、手刷りのガリ版で1枚1枚印刷したものでした。待ちに待った「エデンの園便り」として全国の会員に発送したのがついこの前のことのようにです。

縮刷版を自宅に持ち帰り、テーブルに積み上げて早速めくってみました。「よくもここまで来たんだなあ」と、改めて年月の重さを感じつつ、施設建設申請書などの書類に埋もれながら、初代宮本園長やその時のスタッフで「開園の青写真は必ず形になる!」という思いを確かめあったり、祈り合い励まし合ったりしたあの時の熱気がよみがえるとともに、沢山の方々の顔と声が頭をよぎっていきました。

昭和53年(1978)、「精神薄弱者更生施設エデンの園」として50名の利用者を迎えて開園し、それまでは建設の進捗状況やスタッフの活動状況報告が主だったこの機関紙も、その後は、施設内の利用者の活動状況、家族会のこと、月毎の行事や予定、職員の動き、施設運営の報告等が主な役割となり、機関誌名も「一粒の麦」と変更されて、内容も外部からの投稿や連載、漫画など、担当者が替わる度に新しい企画が登場してエデンの園の歴史を伝えてきました。

利用者の支援制度は次々に改正され、現在は施設を選び、契約によって利用するようになりましたが、制度が変わる度に不安と混乱に悩まされたのが利用者や家族でした。幸い、エデンの園では毎月行なわれる家族会の中で必要な説明をしてきましたが、この機関紙も良い役割を果たしてきたと思います。

社会の片隅に追いやられていた障がい者のセーフティネットづくりとして動いていた「宮崎県重複障がい者を守る会」でしたが、障がいを持った方々の住まいを訪問し、ご家族と思いを分かち合ったり、活動を共にしていくにつれ、「守る」の目線と「共に生きる」の目線の違いに気づかされま

した。その事によって障がいの有無にかかわらず、人としての最低生活を当たり前保障されるという根源に立って、名称を「重複障がい者と共に生きる会」に変更いたしました。本人申請の原則という事で殆ど知られてなかった障がい者年金制度の情報提供、その手続きの手伝い、外出ボランティア、キャンプ、バザー、福祉講演会、コンサート、専門家を招いての医療や進学相談会など、活動は広がっていくばかりでした。

施設開園後は、利用者のニーズがありながら法律の制約や、制度に乗れなかった事業などをサポートし、既成事実を盾にして認可を頂くということもありましたが、法人と違って柔軟な立場で施設内外の障がい者に寄り添う活動ができたのではないかと考えております。エデンの園の家族会は、殆どの皆さんが会員となって全面的に協力してくださり、大きなエネルギー源となりました。

この「重複障がい者と共に生きる会」はエデンの園の家族会、全国の教会、地域の方々、また海外のクリスチャンからも途絶えることのない暖かい献金を頂いて支えられて来ましたが、役員や会員の高齢化などにより、40年の歩みを終え、社会福祉法人エデンの園にその理念を引き継いでいただきました。

これからの「エデンの園」では専門的な教育、訓練を受けて来たプロの職員集団として、質の高い福祉サービス提供を实践する拠点となり、利用者や職員が活かされ合う所、「だれが生徒か、先生か?」と言われるくらい、そんな「共に生きる」目線の支援が出来たら素晴らしいと思っています。

やがて施設も創立40周年を迎えようとしています。前上杉町長が、国富町の福祉課長の時代から当時の高山町長と共に「エデンの園」の誘致には大きな力添えを頂きましたし、今も国富町とは2人3脚で歩いております。

加えて、地元三名地区には、利用者も職員も家族同様のおつきあいをいただきながら交流を持っております。今までの歩みの中で培って来たエデンの園の資源を今後は、地域に喜ばれる形でお返し出来たらと願っております。